

## 第41回 日本ジオパーク委員会 第一部 議事録

日時：2021年1月19日(火)10:00～16:00

場所：日本ジオパークネットワーク事務局

### <委員長>

中田 節也 東京大学名誉教授・防災科学技術研究所火山研究推進センター長

### <副委員長>

宮原 育子 宮城大学名誉教授・宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授

### <委員>五十音順

大野 希一 島原半島ジオパーク協議会事務局次長

久保 純子 早稲田大学教育学部教授

黒田 乃生 筑波大学芸術系教授

欠 齋藤 文紀 島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター長・教授

欠 柴尾 智子 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

菅原 久誠 群馬県立自然史博物館副主幹（学芸員）

田中 裕一郎 産業技術総合研究所 地質調査総合センター

新名 阿津子 伊豆半島ジオパーク推進協議会専任研究員

橋詰 潤 新潟県立歴史博物館主任研究員

長谷川 修一 香川大学創造工学部教授

ヴォウォシェン・ヤゴダ 隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会国際交流員

山口 勝 日本放送協会放送文化研究所主任研究員

欠 渡辺 綱男 自然環境研究センター上級研究員

渡辺 真人 産業技術総合研究所地質情報研究部門・GGN執行委員会委員

### <日本ユネスコ国内委員会>

植村 正樹 文部科学省国際統括官付国際統括官補佐

岡本 彩 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長

### <関係省庁（オブザーバー）> 建制順

末永 珠佑 内閣府 地方創生推進室 主査

柴田 伊廣 文化庁 文化財第二課 文部科学技官

山路 広明 国土交通省 水管理・国土保全局 砂防部 砂防計画課 地震・火山砂防室 課長補佐

青柳 雄也 国土交通省 水管理・国土保全局 砂防部 砂防計画課 地震・火山砂防室 火山対策係

荻野 周 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 エコツーリズム推進専門官

山中 涼太 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室

### <事務局>

齊藤 清一 JGN 事務局長

古澤 加奈 JGN 事務局次長

宮崎 博子 JGN 事務局員

水野 恵美子 JGN 事務局員  
山崎 由貴子 JGN 事務局員  
甲 健太 JGN 事務局員  
古屋 牧人 JGN 事務局員

#### 【開会・委員長あいさつ】

事務局：ただいまより第41回日本ジオパーク委員会第一部開会します。委員長にご挨拶をお願いします。

委員長：やはり新型コロナの話になるが、第3波で行動規制が厳しい中、こうして会議開催することが出来、幸いなことに全11地域の現地調査を無事行なうことが出来た。現地もそうだが委員の方々にも努力いただいて感謝している。委員会最終日(2/5)には全11地域の審査ができる形になる。

前回委員会10月21日以降の活動として、委員会として10月23日に事前相談会を開催した。来年度の国内申請は3~4地域、世界申請は今のところない見込みだが、来年度申請予定地域に対して相談会を開催した。また、この委員会から推薦する白山手取川地域の申請も無事受理されており、このあたりの報告は後ほど行なう。ユネスコ世界ジオパークネットワークカOUNシルミーティングは12月8、9日に開催されており、この報告も後ほど行なう。カOUNシルミーティングでは新しい審査基準となるドキュメントAの話題が出ている。どちらかという客観的な基準に移行する傾向が強くなる。このあと議論を行なうが、審査基準についてどのような形で分かりやすくするか議論していく必要がある。

また、ユネスコ世界審査は昨年から一切行なわれていない。ユネスコは5月以降にできるのではと希望的観測を出しているが未確定である。GGNではデジタルイベントを開催し、世界130近くのユネスコ世界ジオパーク(UGGp)地域250人程が参加し、ユネスコからの情報や、こういった活動をしているかなどを紹介した。2回目が2月下旬に予定されている。日本の地域も参加しているところが多かったが、参加していない地域もあった。

そのような状況のなか、日本は着々と審査ができてきているのは幸いなことで、本日も活発な議論をお願いしたいし、明後日の第二部、2月5日の第三部でも宜しく願いたい。

事務局：前回委員会以降の活動状況について事務局から報告する。11月末に白山手取川ジオパークの申請書をユネスコに提出し受理されている。現在は準備中だが、ユネスコHPの申請地域情報が公開予定である。2点目として、12月8、9日のユネスコ世界ジオパークカOUNシルミーティングにはオブザーバーとして事務局から私が参加した。メーリングリストでも委員会へ報告したが、今回はオンラインということもありアフリカの数か国も含めオブザーバー参加が25か国、今回のカOUNシルミーティングでは、2020年度には現地審査が行われなかったため、2018年、2019年に保留となっていた地域のうち、報告書を提出した地域の審議が中心であった。その他は名称変更やエリア変更の決定についても行なわれた。新Document A(自己評価表A)について確認が行なわれた。これはほぼ完成しており、2021年度については試行期間とすることが決定されている。新規申請の地域へは試行を依頼しようとカOUNシルの中で話し合われたため、白山手取川にも提案がなされるのではないかと想定している。

また、カOUNシルミーティングのなかで役員の改選が行なわれた。議長はひきつづきGuy Martiniさん、副議長はJianping Zhangさん、報告者にはHelga Chulepinさんが選出された。

今回の保留になっていた地域審議の中で、保留期間はガイドライン上も2年となっているが、2年を待たずに1年目で報告書を出してきた地域が数カ所あり、その中でまだ認定には至らない、課題が解決していないのに報告書を提出した地域をどう扱うかについて議論された。過去の事例も確認され、1年目で報告書を出して、認定に至らない場合に再度保留期間がまだ1年あるということの良いのかということを確認された。

上で、2年の保留期間中なので、さらに1年後に報告書を出して審議するということが決定された。

また、海域について、これまでは明確な理由がなくてもあまり問題視されなかったが、今回は海域についても明確に説明するべきではないかという話があった。直線の一筆書きでなかった地域が、報告書のなかで四角に区切った直線を含むエリアになっていたが、そういった議論があった末に、直線が行政界ということがわかったので議論は終わった。今後ともこういう議論が続くと予想している。

さらに、国立公園とのオーバーラッピングについても、国立公園の管理者とジオパークの管理者が同じ団体だったということもあり、明確にどのような違いがあるのかを他のユネスコ事業とのオーバーラッピング並に厳しく議論された。また、IUGSのデスクトップエバリュエーションについても今後ガイドラインができる予定。デスクトップエバリュエーターも苦勞されていて出揃ってくる資料もバラバラなので最低限このようなものを申請書に入れて欲しい、ということを含めてガイドラインを作成されている。3月末には練り直したものが出てきて、9月のカウンスルミーティングで確定される予定。カウンスルについての報告は以上。

また、ユネスコ世界ジオパークである糸魚川、島原半島、隠岐、伊豆半島の4地域は今年の夏にユネスコの現地審査を受ける予定になっており、12月半ばにプログレスレポートをJGCに提出、修正した後、日本ユネスコ国内委員会、関係省庁の確認を終了。最終の修正をして今月末にはユネスコに提出することになっている。

委員長：先ほどの報告に1点追加する。かねてから提案のあった、ジオパークの関連学会からなるジオパークを支援するコンソーシアムの設置の具体化を検討し、そこに世界推薦申請地域のレビューを任せることとしたい。現在までに、準備会を3回開いており、具体案を各学会に持ち帰っていただき、名称を学術支援連合という形で進められるよう準備をしている。今年度中に立ち上げて来年度から運用できるようにしたい。レビューだけではなく、さまざまな学会を通したジオパークに関する連携、学術支援ができるような仕組みを目指している。

以上の報告事項に質問があればお願いします。また、ほか報告事項があれば発言をお願いしたいが1/21、2/5も委員会があるので、その時でも構わない。特になければ次へ進める。

一同：(発言なし)

委員長：では、2つ目の再認定審査について、ここで皆の意見を伺い認識を共有したい。この委員会は昨年4月より委員を追加して行ってきた。昨年度までは調査運営部会があり、そこで議論・審査を行い、委員会へ結果を報告するスタイルで行ってきたが、今回からはこの委員会で全てを議論することになる。そのため今回のように3日間に分けたうちの1日目となっている。

審査の中で、条件付き再認定、いわゆるイエローカードと呼ばれるものを議論することになるが、その際に問題あり、とされるのはどういったことがポイントであるのか、共通理解として条件付き再認定の基準めいたものを作れば良いが、無理でもきちんと外に対して納得いく説明できることを目指して議論したい。今まではコミュニケーションや連携が足りないという理由で条件付き再認定とした例もあるが、委員会での結論が必ずしも地域に受け入れられていない状態があった。そのなかで天草が日本ジオパークネットワーク(JGN)を退会する形にもなっている。

条件付きを出さなくても分かりやすく、何が課題で、どういったことを行えばその問題を解決できるのかという道筋を添えて審査結果として報告できるようにしたい。委員会でも、どこが問題でどのようにすれば改善できるのかというところまで議論したい。特に、今回、新しく現地調査を行なった委員もいる。現地に出された課題をどのように解決していけば良いのか、そのあたりまで踏み込んで議論し報告書を作りたい。単にコミュニケーションや連携等が不十分だからイエローカードを出すということではなく、これまでの課題の改善や、前進した事柄についてもきちんと評価を行いたい。

ここはまず、経験の長い委員に発言をお願いしたい。

委員：本当に難しい。ユネスコもそうだが、基準を作る方がすっきりするのはよくわかる。ただ、ジオパークの場合は広さ、運営体制、自治体規模も全て異なるし、ジオツーリズムについても、元々観光的に開発されている地域とされていない地域とで課題が異なる。また、一方で長年委員をしていると、この地域は問題があるなということが経験からある程度予想がつくが、予想は良い方にも悪い方にも裏切られるので、経験だけでも難しいところ。

委員長：なんとなくおかし、ではなく具体的な課題を示せるように議論できればいいが、副委員長はいかがか。

副委員長：そう思うが、一方で日本のジオパークの特徴として事務局を自治体主体で運営しているところがほとんどであるということで、2、3年で担当者が入れ替わり、引継ぎができない形でジオパークに関わっていたり、熱の低い方がメインになったりと、ヒト的な要素が審査の印象に大きな影響を及ぼしている部分がある気もしている。それを除いて、これまでどのようなことをしてきたかということ、審査する側が自己評価表も見た上で、ある程度の客観的な目をもって行うのが大事なことと思う。

委員長：事務局がどういうポイントを気にしているかについて発言願う。

事務局：昨年、一昨年位から、条件付きになった地域に審査に対する考え方を聞く機会がある。その中で委員会が指摘した事項に対する考え方として、わからないけどやらないといけないと受け取って苦しんでいる現状が見えてきている。これまでの10何年かに渡る活動で、委員と地域がコミュニケーションを取れているところは、わからないことはわからないと言って確認ができるが、ジオパーク数も増えてきており、なかなか本音で話せていない現状があるのではないかと感じている。現地へ行かれた際に、地域の皆さんと委員との間で、どこが問題でどう課題として解決していくのかということがある程度共有ができてきているところは、委員会がどのような結論を出しても地域ではそれが理解できて今後の活動に繋げて行けるが、明確でないまま課題が示され、その後の2年、4年を分からないままで活動して苦しくなっているのではないかと思う。委員会で結論を出すにあたっては、より具体的に、このままでは4年間持たないから至急改善して活動をもっと良くして欲しいと、より具体的な事象を示し、双方でコミュニケーションをとって理解し、課題の共有ができれば良い方向になっていくのではないかと考える。

委員長：今、共有しておきたいのは事務局の発言のように精神論的な部分が強かったので、来年から地域の方に分かりやすく示す方向へ行きたいと思う。今日の審議では特に現地調査員の提案として「△(条件付き)」がついている地域もあるので、どういう形で我々がアドバイスをするかという視点で議論いただければと思う。今の内容で追加したいことはあるか。

委員：私が初めて現地調査を行った桜島・錦江湾ジオパークの例がそれにあたるのではないかと思う。現地調査員3人は「○(認定)」としたが、その後の委員会で議論した際には、エリア拡大申請について、拡大するエリアに看板等が設置されていなく、クライテリアからして出来ていないという指摘を受けた。このあたりは各ジオパークで認識の相違があるのではないか。その後の鳥海山・飛島ジオパークでは、新規認定前でも看板を設置しておき、認定後にロゴが現れるようにしていたことから、各ジオパークにより認識に差があることがうかがえる。認定には何が必要で、何が必要ではないのかというところが理解されていない部分があったのではないかと思う。もちろん認定基準は書面に記載があるが、例えば「エリア拡大申請の際は予定エリアに看板を設置する」等の記載はない。そのあたりのレベルアップをうまくJGN内ではかる、もしくは日本ジオパーク委員会(JGC)で明文化できると良いのではないか。事務局の連絡機能や交流を行っているかは現地へ赴き調査するわけだが、クライテリア等の皆が行わなければならない部分を各ジオパークがどのように理解して、協議会が動くかというところに温度差があるように思う。そのあたり整備していければ良い

のではないかということを感じた。

委員長：桜島・錦江湾についてはこの後でも議論する。

事務局：今の委員の発言に関連したカウンスルミーティングでの報告として、セルフチェックリストというのがカウンスルでまとめられている。このセルフチェックリストは自己評価表にとって代わるものではなく、自己評価をして申請できる状態か否かのチェックのために使うという位置づけのものであった。内容としては101項目あり「パートナーシップ協定は結んでいるか」等、かなり具体的に示されているので、委員がおっしゃったものに近いと感じる。ただ、ユネスコ世界ジオパーク用であるので、今後日本で活用していくにあたっては、活用できる部分と当てはまらない部分とがあると思うが念のため情報共有させていただく。

委員長：今議論したことを念頭に心がけながら議論を進めたいと思う。

#### 【審議事項 議題①】

委員：この立山黒部ジオパークは、前回条件付き認定になっており、その2年後の再認定審査になる。

現地調査報告書をご覧いただくと、前回の指摘事項に関する取り組み改善点12項目のうち1番から8番までが1年以内に緊急に解決して欲しい課題であり、この1~8番がイエローカード解除の条件になるかと思う。そして、この1~8番の内容に関して非常に良く改善されている。

一つ良いと思ったのは、条件付き再認定が出された直後に、現地調査に来た2人を呼んでワークショップを開くと共に、指摘事項について何が問題であったのかをきちんと聞いている。指摘事項の趣旨に合った本質的に意味のある対策をしているのがとても良かった。

重要だったのはジオパークの目的の共有、事務局強化、保全部会の立ち上げ、この3つがクライテリアにも関わってくる重要課題であったと思う。この3つについて非常に良く改善が成されていると思うし、ジオツーリズムについても新しい活動が始まっている。

ビジビリティに関しては、自治体主体のジオパークではないので簡単ではない所もあるが、できる範囲で多くの活動がされており改善がみられている。指摘事項に関する改善は非常によくなされていることがわかった。

さらに、報告書には書かなかったが以前のメンバーのなかにはジオパークやネットワークのあり方についての理解が不十分なのではないかと感じる言動をされる方がいたが、新しく事務局長や研究者2名が赴任し、地域団体との連携が良くなり、いままでジオパークを遠巻きに見ていたような博物館学芸員や、大学との連携等がとれるようになり一気に活動が進んだ感がしている。

そういう意味では前回の条件付き認定が刺激となり大きく進んだということで、現地調査を行った3名の結論は「再認定」となった。

現地調査を行って感じたが、たとえばの話、中国のジオパークでこのジオパークにはデモクラシーがないと言っても始まらない。本当の意味でのボトムアップではないがそれを言うては始まらないので、中国のジオパークなりにできることをアドバイスする。またヨーロッパのジオパークでは、中国のジオパークのようにすごいビジビリティがないだとか、立派な博物館がないなどと言っても始まらないわけで、実情に合わせて審査をしている。立山黒部ジオパークは自治体主体のジオパークと異なり、自治体主体であるよりもすぐ出来ることがあって、企業との連携や、ツーリズムもよりビジネスライクにできる。一方で駅に看板を設置するなど、一民間企業としてはきわめて難しく、自治体主体のジオパークとは少し違った目で見ることがあるという感想を持った。

それらも含めて、この2年間活動が非常に進んだと思っている。

委員長：今の報告について質疑を始める。

委員：前回イエローカードを出したメンバーとして一つ。立山黒部ジオパーク協会は民間団体としてもものすごく素晴らしい活動をしていて、そこに自治体が追いついてこなかったという構図が見えて、黒部市は非常に一生懸命やっていたし、滑川市も教育事業に力を入れてやっていたと思うが、そのあたりの自治体の関わり方に具体的な変化はあったか伺いたい。

委員：黒部市と滑川市が中心ということに変わりはないがブラ富士という富山市内のツアーをする形で富山市が関わるようになった。あと立山町も立山山麓地域に山麓ガイドが中世からいる地域なので、以前よりも関わりが増していると思う。一方でおつきあいだけの自治体があるのも事実。ただ、進歩はしている。

委員：自治体数が多いので、ある程度の温度差があるのは仕方がないと思う。ただ何もしていないわけではないと思う。自治体に関しては先程のビジビリティの問題で、各行政が管理している看板に立山黒部ジオパークと入れてはどうかという提案もしたと思う。自治体として向いていることと、民間として動くことなどバランスを取れば素晴らしいジオパークになると思うし、そういった活動が合っていると思うので、ぜひこれからも個人的に応援したいと思っている。関わりが進歩したのは安心した。

委員：看板については 50 数枚ほど。QR コード付きで設置されているが、ただ目立たない。指摘に対して設置したことは良いが、看板を新しく設置しろと委員会が言っていると思われる。そうではなく看板を改修する必要がある際にジオパークがきちんと関わるべき。

委員：私もイエロー判定の際の現地調査員であったが、当時一番気になったのは事務局と協議会メンバーの不協和音がヒアリング中に出てきたこと。かなりギクシャクしていた印象を受けていたが、今は事務局体制が変わってそのあたりの心配がなくなったと理解してよろしいか。

委員：以前の状況を知っている方から見れば、驚くべき変化があったといえるくらい良くなったと言える。

委員長：報告書にも自治体が主体ではないので、それで良い面もあるし、迅速に対応できない面もある等の悩みが書いてあったが、組織に自治体が加わっているのだから、自治体をもっと積極的に動けるしくみになってきているという理解でよろしいか？

委員：そのあたり温度差はあるが、だんだん理解が深まっているということで良いと思う。ただ、行政が協力しているのが、ジオパークを理解しているから協力しているのか、協会長の人徳によるものなのかかわからないのが難しい所。会長が退任されたらその後どうなるか心配している。

委員長：逆を言えば会長を説得すれば看板等の整備が進むかも知れない。

委員：そうかも知れない。自治体の方は JGC がどのような指摘を行うのか気にされていたので、具体的に自治体のすべきことを書けばすごく良くなるのではないか。

委員長：実際の報告書の内容についてはお互いにやり取りして仕上げていく。また、本日審議した分のプレス発表文は本日の最後に書き上げたい。

立山黒部については改善されたということで認定したいが異議はあるか。

一同：(意見なし)

委員長：それでは、立山黒部ジオパークは 4 年間の認定とする。

## 【審議事項 議題②】

副委員長：南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク（以下、南アルプス）は、2008 年最初にジオパークができた時にスタートしたジオパークのひとつ。富士見町、伊那市、大鹿村、飯田市の 4 市町村で構成されているが事務局は伊那市にあり、伊那市メンバーが主に事務局をしている。過去の指摘事項について、ひとつは「事務局の運営体制の強化」、4 市町村がバラバラに活動しているということで、ジオパーク活動の一体化を図って欲しいということと、「ジオサイトの保全」「ジオパークガイドと連携したジオツーリズムの強

化」、ジオパークエリア全体のストーリーを語るガイドの養成に努めて欲しい。そして4番目として「解説看板の統一的な作成」、これは市町村別々に作成しているということでガイドラインを作って整備してくださいということです。それから「国際対応」と多言語化、「拠点文化施設でのジオパーク情報発信の充実」「南アルプスのテーマと周辺地域とのネットワーク構築を進めてほしい」という7つの指摘事項があった。もう一名の現地調査員との2名で、南の飯田市から入り、富士見町まで調査を行なった。

良かった点に関しては、一部の地域で住民の方達が自主的に露頭の管理をしていたり、化石に関しては長谷という地域が、産出した化石を持ち出さず地元で保存して蓄積するという地道な活動をされている。それから今回すごく良かったのは教育活動で、高遠高校でジオパークを活用した教育が活発に行われており日本中のジオパークを生徒が調べて壁新聞を作成したり、高校でジオパーク活動をどのように推進するかについて考えられているのは非常に良かったと思う。

今回、改善を求める点の総括として、前回の再認定審査での指摘事項について、この4年間でほとんど改善がされなかった、改善の動きがみられなかったという判断をした。

各4市町村の担当者・関係者にヒアリングを行ったがジオパークの理念、南アルプスのジオパークとしてのコンセプトの共有についてしっかりと聞くことができなかった。

また、ジオサイト、自然サイト、文化サイト、ビュースポット、こういった各サイトの整理が不十分でデータベース化も整備中という形になっている。

それから、事務局体制は大きな課題だと思うが、伊那市の担当者のみで運営しているということで、エリアがとても広くて山深いので、物理的に他市町村と交流が難しい所もあるが、今はオンラインもあるのでコミュニケーションをとられた方が良いのではないかとこのところ。

また、中長期的な計画、具体的な活動は他市町村と共有して進められない、スピードが遅いのではないかと考えた。

あと、ジオサイトのゼロ磁場観光の住み分けと、ジオサイトとしての価値の再検討という、これは前の方でも指摘されているが、ここに関してもやはり変わらずというか、どちらかというゼロ磁場観光の整備がすごく進んでいて、駐車場やシャトルバスが伊那市観光協会のほうで非常に進んでいて、ジオサイトの看板が隅にあって、その場所の科学的な価値との住み分けというのはできていないと判断した。

また、ジオパークの拠点施設が整備中で、展示内容の充実を望むのと、地域全体を通して変動の激しい地域で、土砂災害、河川の防災に関しても学ぶところ、考えさせるところがあるにも関わらずそのあたりがジオパークのテーマに上がってきていない部分を指摘させていただいた。

そして、ジオガイドも養成して欲しいということです。

総括としては、前回の指摘に関してなかなか改善の動きが見られなかったということで、イエローを提案させていただく。

委員長：報告があったように、課題についてほとんど改善できていない。事務局体制にも問題があり、情報共有とかどういう形で南アルプスへ伝えるか。不十分さがかなり目立つ。前回から前進したのは教育。それから化石の保存はきちんとされていること。この報告について質問意見等をお願いしたい。特になければ私から質問を。事務局体制は、結局伊那市の2人がしているということか？

副委員長：伊那市に事務局が置かれており、メンバーは3人専任、あとは臨時の方。事務局長が今年4月交代で、専門員も前の審査の時にはいなかった方になっている。前回もいた事務局員は1人いるが、今回の調査に同行していても積極的な情報提供をいただくことはなかった。

委員長：専門員はいたか？

副委員長：地質の専門員がいる。

委員：中央構造線というのがテーマであって、南アルプスというのは前面に出ていないのか？

副委員長：このジオパークの一番の売りは中央構造線を境にして外帯と内帯の地質が異なるという部分で、大鹿村に中央構造線博物館がある。そういったところの景観の見え方等々が大きなテーマになっている。南アルプスに関しては、飯田市の遠山郷の方達が南アルプス登山のガイドもしていて、その方達が少しジオパークで得た知識を提供していくという形では話しをしている。

委員：少しもったいない気がしました。

副委員長：そうですね。

委員長：ゼロ磁場は伊那市が積極的に市のHPでも取り上げているが、特にそれでジオパークを宣伝しているわけではないけれど、一応ジオサイトになっている。学術的にかなり問題があるので何とかして欲しいと以前から言っているが、そのあたりはまったく進んでいないということか？

副委員長：整理をしたとは言っていたが、実際に行ってみるとジオパーク協議会の構成員である伊那市の観光協会がブースを出して観光客の対応をしている。ジオサイトとしては横に看板があるだけという形。今回行った際に、ジオサイトの説明看板を少し離れた所に移動させてはという提案や、そのサイト自体をジオサイトから除外しても良いのではないかというような、整理の仕方について考えてほしいということは伝えている。

委員長：ここでのジオサイトとしては何を売りにしているのか。

副委員長：分杭峠からフォッサマグナ、富士見町の方を見た時に一直線であるという景観を説明している所。そこが実際に南アルプスジオパーク全体の谷が直線的であるという景観が確認できる場所という位置付けなので、これに関しては他の所でもできるのではないか。ここで研究したものがあればレビューから整理してほしいということで、ジオサイトとしては設定し直す必要もあるのかなということ。

委員長：拠点施設の整備は？

副委員長：長谷の道の駅にある木造の山小屋的な施設を改築して拠点施設にしようとしている。ただ、展示内容は本当にただ貼ってあるだけであったり、プロジェクションマッピングで中央構造線の谷の出来方を説明するものもあるが頼まないといけないし、そこにいる人も操作をするくらいで、具体的にジオパークを説明する人ではなかった。施設はできたが、まだ途中である。

委員長：協議会長のスタンスは？

副委員長：会長は伊那市長だが、ご本人が音頭をとって南アルプス（中央構造線エリア）ジオパークを立ち上げたということで、今回ヒアリングも行なったが、ご本人が山登りを大好きで、ここにジオパークがあるといいね！という形で語られていたが、具体的にジオパークをどういう風にしていきたいのかはあまり聞けなかった。

委員：全国大会までやったのにもったいない。例えばここで条件付きを出した時に、全ての課題が2年間で解決できるか心配している。大切なことを具体的に、改善を促すやり方しかないのではないか。前回の指摘のなかでも大切なところは運営体制の強化等だったと思うが、国際対応については優先順位が高くないと思う、あと拠点施設が動きだしていて、防災教育についてもポテンシャルがあるなら後回しにして、ここだけは絶対体制として整えて欲しいという部分に注力したりコメンテーションの方が地域が動きやすいのではないかと思う。

副委員長：会長宛の審査結果報告書には概ね1、2年以内の内容はそのあたりを少しかき分けているが、もう一度確認をしたい。他のジオパークもそうだが、沢山課題が出てきてしまい、2年間で解決できるかというのは難しいところもある。特に事務局が新しいメンバーが多いということや、他市町村とのコミュニケーションが取れてない部分もあり、例えばイエローを出した後にJGNやJGCから様々な形でのアドバイス支援が



必要。特に、支えることが必要だと思う。冒頭に説明があった通り、本来であればジオパーク側から分からないことの相談があってしかるべきだと思うが、そのあたりのコミュニケーションがうまくいっていないところがあり、こちらから働きかけ、ないしは支援をして行きながら、一緒に2年間過ごしていくやり方もあるのではないかと思った。

委員：賛成する。

委員：この地域は12年ジオパークをしてきているが、これだけこなれてこない。エコパークもしてきているが、ジオパークが地域のためになっていないのではないかと。2年間は立て直しの方で、閉じる議論を示すのも良いのかも知れない。今の事務局体制でジオパークを理解することによって伸びるのか、それとも難しいのか。冒頭に書かれている事務局長の発言も、100点を目指すところはないという発言があったと書かれている。イエローを出した時の伸びしろ・見込みの印象はどうか？

副委員長：現地調査を担当した私たちも難しいという印象は持った。これだけやってイエローというのは考えなければいけない。

なによりも、ジオパークを頑張ろうという地元の方達の意識が、ないわけではないが、ジオパークは地域にとってどういう役割があるのか、また、自分達のジオパークにどのような魅力があって、それをどのように発信していけば良いのか、というその部分が弱いというか、まだそこが共有できていない。やりたいことをやっているが、結果として外に見えてくるものの発信が弱かったり、理解が進んでいないのではないかという印象が強いので、2年間でクリアできるというのはかなり難しいとは思う。

抜本的に、事務局を伊那市のみでなく他市町村からの出向者を入れて、そこでしっかりとジオパークで何をすべきかを確認しながら短期集中で、先程委員がおっしゃった必ずすべき大切なことを立て直して行くことが重要かと思う。9つを100パーセント2年間では難しく思う。

委員：そのとおりだと思う。ゼロ磁場の民放報道で現地のジオパークの看板を見せて、これで意味があるのかね？というバカにする感じで使われてしまっていたので、由々しきことであると感じていた。あと拠点施設もそういう観光施設をつくる感じがしている。本来、大鹿村の中央構造線博物館のように地味だけどまじめにやっている博物館もあるし、古生物学の先生も伊那谷にいたところなので、真面目にジオパークをやろうとすれば様々な切り口がある所だと思うのに、伊那市の観光をしたい方の中でしか動いていない感じがしており、そのあたりを憂いている。

委員：中央構造線に絞りが過ぎているからついていけないのでは。伊那谷の段丘地形とか楽しいところが沢山あるのに。中央構造線で押していくのは難しいのではないかと思った。

委員長：昔、世界遺産等との関係で、アルプスだけを出してきたと思う。地域にめざす仕組みを考えるにはいい機会かも知れない。

事務局：先程委員の発言にもあった通り、ゼロ磁場の問題についてはJGCとしてもずっとアドバイスをしてきたことだと思う。そもそも磁場とは何かについて観光客に伝える別のアプローチを積極的にしてこなかったことが報告から感じ取れた。積極的にジオパークという科学プログラムを使って磁場とは何かについて解説してなかったということではよろしいか？

副委員長：はい。そう言ったことは特になく、看板だけ置いている。観光のほうのゼロ磁場にすごく押されていて、そこをどう切り分けていくかという議論も事務局サイドでは成されていないような形。

委員長：かなり問題があるということでイエローはやむなしだが、これからどうサポートしていけるか皆で考えをまとめて報告書を書き上げていければと考える。

ここは条件付き2年でよろしいか。

一同：(意見なし)

委員長：異議なしということで、条件付き再認定とする。

### 【審議事項 議題③】

委員：結論から言うと二重丸。非常に事務局も4市町、秋田と山形に県をまたがる構成だが首長同士仲が良く、バランスも良い。情報共有もされているし、事務局員の構成も4市町から出ているが全体のことを考えている。

それから前回の指摘事項にあった丸池様と呼ばれる山岳信仰の中心にある湧水の池の保全についても、すぐに対応されていて、池に入らない、土砂を入れないようにというだけではなく、そこへどれだけの人が訪れるのかを計るセンサーを設置計測しており、データに基づいた保全と活用を行っていて、コロナ禍で人が減った中でも増えている、もしくは本当に減ったねということカウンターで確認できている。

緊急事態宣言解除後にはどうしようかという時に、県内の修学旅行の受け入れ先になったり、ガイド活動で過去4年間に300万円の収入を得ているが、そこに総額80万円で補助金をつけて、ガイド費用の半分を出しますというキャンペーンを打ったり、世界不思議発見などのメディアへ露出したりと活用戦略が非常にうまくいっている。

前回の指摘事項である西の松島と言われる象潟の保全についても県の圃場改善事業に取り組むとして既に動いており、景観はなるべく保全しながら、効率的な農業だけでなく取り組んでいく枠組みが出来つつある。

一方で景観は大事だが、火山地形、流れ山、火山地質に寄ったところがあったので、象潟地震の証拠であって、そう言ったものが圃場改善事業で天地返しをしてしまうと、昔の海の堆積物だとか地震を復元するだとか過去の海面変動などの資料が失われる可能性があるのも、そこは早急にひっくり返す前に、松尾芭蕉が詠んだり、伊能忠敬が測量をした貴重な場所でもあるのでジオ、あるいはサイエンス、文化的にも重要な場所であるので学術調査できるようにして欲しい旨を指摘事項として示した。

また、2018年にクルーズ船が酒田港に寄港した際、インバウンド観光客30名余りをジオツアーに案内していたということが、ジオガイドの会報誌に記されていたが、この船は去年横浜港に停泊した新型コロナのパンデミックで大変だった船であったので、鳥海山・飛島ジオパークという、日本のローカルなところでも、グローバルなパンデミックに対応する必要があると教えられた。

事務局に困りごとを尋ねたところ、防災関係のことでもっと横の連絡を良くしたいので、防災危機対応について指摘してほしい旨をリクエストされ、自分達に何が足りないか何が必要かがわかっている方々がいる、すごいジオパークだと感じて調査を終えた。副委員長もアドバイザーをされているので、それがいい動きに繋がっているのかなと感じた。

委員長：それでは質疑応答を開始する。

委員：前回の審査に赴いた際、指摘事項「4、飛島や八幡地区のような取り組みをもっと拡大し活動の担い手を増やしていく」という部分の意図が、自治体には地域住民の自発的活動が見えなかったものですから、地域の人の自発的な関わりや取り組みにどんな変化があったか教えていただきたい。

委員：八幡と飛島は相変わらずというかよりパワフルになって活動されていることがわかったし、その他の地域についても学校教育において、4つの市町でジオパーク学習ができています。そこがきっかけになって「あそこをジオサイトにしようよ」という動きが出来てきている。酒田市街地にはジオサイトはあまりないが、認定品制度を設けて領域内にあるジオ、地下水を使う酒屋など、町中にありながらも酒田の港が発展していく中で、地形、風、海とを絡めて認定品を作るというようなことで、地域と地場産業、ジオとつながるということで、色々な地域が町内、市街地、企業、学校だったりの動きの自律的な立ち上がりが見えた。

各町内等でそういった取り組みをしてください、というアドバイスは我々が行けばできると思うが、それをどのように実現するか仕組み作りを事務局や4市町が考えていて、例えば認定品制度を作るにあたり、今まであまりジオパークと関係していなかった企業の人たちも中に入れてしまうとか、看板を設置しましょうというのも工夫されていて、設置予算は協議会と市町で半分ずつ出し、4市町で看板を立てたい時は提案をして貰ってから立てるとしている。これはもう一人の現地調査員が感動していたが、複数市町村で構成されているジオパークではどうしても自治体間で温度差が出てくるが、予算の半分が協議会から出るとなると、インセンティブが働く。具体的にどうしたら指摘事項が改善するかをよく考えているジオパークであり、事務局であり、市町であると感じた。

委員：すごく羨ましい。

委員長：先程伝え損ねたが、副委員長は利害関係者ということで発言なしでお願いします。

委員：前回私も現地調査を行った。2点お伺いしたい。まず1点目は県のサポートについて。前回、山形県のサポートがあまり見えなく、消極的だったところがあったが、具体的に改善された部分を詳しくご教示願う。そして2点目はユネスコ世界ジオパークを目指すということで、次の4年間はその準備が始まると思うが、課題みたいなものは見えているか。

委員：山形県の庄内地域事務所も協議会メンバーに入って、秋田県側とのバランスが取れた。秋田県は県内のジオパークの協会のようなものを作っていて、県とも連絡が取れている。バランスの違いがあったということだが、山形県の庄内地域事務所が協議会メンバーに入ってそのバランスは取れたと思っている。ただ、4市町の首長達はあまり県には頼りたくないと言っている。予算を出してくれた場合、その分関わってくることになる。せっかく県の垣根を越えて4市町で一生懸命しているので、なるべく県には頼りたくないとのことであった。

また、ユネスコ世界ジオパークを目指すというのは、何が何でもということではなかったが、ジオパーク活動は繋がりを広げる活動であると、協議会や首長は考えていると述べられていて、延長として国内ではジオパークネットワークで繋がれたので、これを世界に広げていきたいとのことだった。そういうところでは目指していきたいとのこと。何が何でも次の4年間でやるとは言っていなかった。それまでのステップとして協議会の副会長である酒田市長が法人化しないといけないと、あちらから言われてきた。それについても4市町で一緒に考えていきたいと言われていた。

それから特徴を出すということを私から伝えたが、日本のユネスコ世界ジオパークは圧倒的に火山が多くて、火山が日本海側にそそぐ地形というと白山手取川とも被るので火山だけで勝負は弱いもったいない。象潟の地震や、庄内平野東縁断層帯、飛島は地震性隆起をしているところなので、地震と火山のジオパークという形で特徴づけて、その際に象潟の保全も位置付けるということではできないかということをお願いしたら、それは是非やりたいと秋田大学の先生も同意されていて、第四紀の方も入れないとですかね、とも言っていた。他とは違う特徴を出していこうとしていた。なりたいたらやる、ではなく、我々はまだ研究が足りない、教育をやっているが科学研究という面では足りないなのでその辺りを進めていきたいとおっしゃっていた。

委員：相変わらず優等生な印象。ほか地域も勉強に行けば良いのではないか。

委員：今回の現地調査を終えてみて、桜島・錦江湾の例も含めて、ほかの地域もみな勉強にいけば良いと感じた。以前、三陸ジオパークの現地調査の際にジオガイド達から、東北ブロックで集まって勉強会をした際に、鳥海山・飛島の人たちからジオパークを何のためにやっているのかということをお教わったと聞いていたので、今回鳥海山・飛島での現地調査を経験して、こういうことかと合点がいった次第。

委員長：気になったのは、中学校の取り組みでジオサイト発掘隊が新しくジオサイトを登録したと聞いたが、

よく理解できない。ジオサイトには科学的な根拠があるが担保する人がいたのか否か。専門員がいないと書いてあるが、秋田大学の研究者がサポートする仕組みになっているのか。

委員：学校のジオパーク活動で指摘をして、それを学術審議会のような所にかけて登録する仕組み。学術的なことは、やはり秋田大学の研究者が関わっていて、そういう意味で学術研究は地質に偏らないバランスが必要かなと感じた。研究の補助等の委託の多くは秋田大学へ行っている点は指摘させていただいた。その他は民俗学等も含めてバランスよく出している、協議会としては考えて出していると感じた。専門員は民俗学専門の方がいるが地形地質がないので早く確保したいということも、事務局側からの困りごとのなかにあり、指摘してほしいというリクエストがあった。指摘してもらうことで予算化ができるし、短期的にはすぐ増やせないが4年以内で早めに取り組みたいとのことである。

委員長：以上で意見がなければ判断したい。追加で意見はあるか？なければ、再認定で問題ないように思うがいかがか。

一同：（意見なし）

委員長：では、鳥海山・飛島ジオパークを再認定とする。

#### 【審議事項 議題④】

委員長：午前中は3地域について議論をしてきた。南アルプスについては、条件付きになったわけだが、これについてはもう少し具体的な課題を明確にしたいので記者発表資料作成時に再度振り返り議論を行う。それでは議題④の報告を願う。

委員：JGC から委嘱された方と2名で白滝ジオパークの現地調査を行った。課題としては上から3つ目までが緊急的に解決しなければならない課題で、「全町的なジオパークの可視性向上」や、「全町的なジオパーク活動の実施」「活動をサポートする人材の育成」が指摘されている。

あとはなるべく早く解決することとして「地区やジオサイトを横断するストーリーの構築と活用」「地域の持続的発展のためのジオ関連商品の開発や再発見」が指摘事項としてあがっていた。

今回、可視性の向上に関しては、JR 遠軽駅前にマップの載った案内板が1基設置されていたり、ジオサイトの解説看板がジオサイトと文化サイトとで1基ずつ設置されていて、スイングバナーを関連施設に設置する等の努力は見られた。ジオパークとして可視化に努めてきたのは見受けられる。あともう一つ、サポーター制度を新たに始めて、33の事業所に協力してもらっているそうだが、ジオパークのステッカーなどを事業所に貼ってもらって可視性の向上に努めている。

良くない点としては白滝地域以外でジオパークの文字をほとんど見ない。JR 遠軽駅に設置した大きい看板も、人々の動線上に沿っているのか疑問がある。人が溜まるような待合室には何も置いていなかった。また北見バスターミナルにもポスターやチラシの掲示は見受けられなかった。

全町的なジオパーク活動の実施に関しては、前回審査の後に基本計画を策定しその冊子を全戸配布している。町民にジオパークを認知してもらうのに役立ったと考えている。しかし、全町民が参画しておこなっているジオパーク活動がみられないので、はたして全町的なジオパーク活動ができているのかは、かなり大きな問題。あとはジオカフェが2017年度は8回実施していたが、2018年度は1回しか実施していない。事務局の意見としては人員的に厳しくなったと言っていて、前回の審査結果後2017年4月にフルタイム5人体制から3人に減らされており、2人減ったダメージが大きいとのことだった。人員についてはさらに2019年3月に専門員が退職し、それ以降専門員不在が続いている。

次の、活動をサポートする人材の育成についても消極的で、「えんがあるジオ倶楽部」というガイド組織のNPO 法人があり、そこへ委託業務を行うことで、お金の流れができて、ある程度のサポートが出来ている。

ただ、ガイドの講習がされてなく、それに関連するリスクマネジメント講習も年1回実施しているが、ガイドも参加できますよ程度の位置づけで、ジオパークに関する講習は行われていない。

ストーリーの構築は、前回指摘された通り、湧別川水系をたどって周遊するストーリーを構築してツアーを実施しており、約200名参加者があり、若い女性も参加されていてインパクトがあったとのことだったが、実施はその1回だけで後が続いていない。

最後のジオ関連商品は、黒曜石で有名なジオパークなので黒いソフトクリーム「ジオソフト」を道の駅で販売しているが、売上はあまり良くないとのこと。あとは「ジオガシ旅行団」に黒曜石モチーフのジオガシを開発してもらったが、売り手の協力体制が取れずに停滞しているとのことだった。作っていくのはプラスに評価できると思うが、あとが続いていないという状況である。

全体的に、プロGRESSレポートを読んだ際は絶望的な文章が多く、ジオパークを継続する意思があるのかも疑問であったため、継続する意思について確認をおこなったところ、協議会長にも事務局にも継続する意思の確認が取れた。事務局については、指摘事項は実直に取り組む意識は持っている。複数ある協力団体、例えば外来種を駆除するような団体等が、ジオパークの活動に協力的である点は評価できる。あとは強力なステイクホルダーもいる。この方は町長との対話もでき、土木建築業の方なのでサイトの保全もできる。さらにジオパークにプラスになる人材をひっぱりてくることができるといえる方なので、将来的にうまくいけば今後の展開に期待できると思っている。

ただ、議論の点として人員削減と専門員不在がジオパーク活動の停滞やボタンのかけ違いのようになっていると考えている。それは地域住民が参画できるイベントがほとんどなくなってきていることや、ジオカフェがなくなってしまう状況など、力点が定まっていない状況である。現地調査員のなかでは、ここは一度体制を立て直し、正しい方向に進んでいくための2年間とうことでイエローカードを提案している。

委員長：課題ははっきりしていると思われる。それでは質疑を受付ける。

委員：専門員を補充していないというのは間違いなく課題で、それだけでも状況は変わると思うが、いい人がいれば採用する気はあるのか、それとも財政的に難しいということなのか。

委員：財政的にかなり難しい状況。町長とも話したが、現在、教育学部の地学を出た職員が異動してきている。彼は学生時代に遠軽のジオサイトに関する流れる水の働きなど教材開発に取り組んでいた。今は彼が事務局にフルタイムで入っているから良いが、今後異動する可能性があり、そのことは町長も総務部長も把握しているが財政的にもう一人入れるのは厳しく、他部署でも人員が不足している状況であり雇用を生み出すのは大変とのことであった。

委員：事務局体制が3人になっており、そこから抜けた一人がガイドという立場になっていると思うが、レポートを見るとその方に25%エフォートがあると記載されているがどのような形で関わられているのか。

委員：その方は今回もガイドとしていくつかのジオサイトを案内して下さったが、このようにガイドとして動いている。現在は民間企業の会社員なので会社所属としては動けないが、ボランティアとして動いている。

委員：黒曜石の国際会議に私も少し関わらせていただいているが、そこにもその方は関わられていて、結構貢献されているのだと思うが、ボランティアベースでは持続性のない関わり方になると思うので、あまり有効ではないのではないのか。そのあたり、しっかりと関わられるような形になると良いと感じる。

委員：現在は、ジオパーク関連の委託業務とか地図関係の仕事がされている。そういったものの委託で連携していくという話をしていた。ただ、これをどうやって持続可能にしていくか。今後、その方が遠軽町内で独立していくのかどうかという話もしていたが、個人的にジオパークに寄り添って行くのかなという雰囲気であった。

委員：専門員も含めて、かなり中心にいた2人が抜けたというのは、ただ人が抜けたということとは違う状況

だと思うので、そこを心配しているところ。

委員：現地調査員2人も、イエローに限りなく近いグリーンか、それともイエローかですごく話し合った。しかし人材不足で一番気になるのは、地球科学のバックグラウンドとした人で、今の状況と予算の状況を踏まえてジオパークを運営していく人がいない点が一番痛い所だと思う。そこをどういう風に改善していったらいいのかということで、JGCで、人を雇うという一文を加えるのはトップダウンのようになってしまうので難しい。それよりもジオパークの財産としては、不況を乗り越えていくために、はじめの南アルプスの話と同様に、JGC、JGNがもっと深くかかわって正しい方向に導いていく、一緒に頑張っていくことが必要と思う。

委員長：かなり深刻だが、以前いたお二人が辞めたのは財政的な問題か？

委員：元専門員にはヒアリングをしていないが、もうお一人の方は人員をがくんと減らされ頑張り続けていて、どこの段階で心が折れたかは不明だが、状況的にも台風の被害でメインのジオサイトである八号沢露頭に数年間アクセスできない状況にあった。八号沢露頭は去年環境省と連携し、えんがあるジオ倶楽部に委託して道を再開させた状況。実質的には調査に間に合わせる形でアクセスできるようにしてくれたのではないかな。かなり内容が深刻というか、関わっている人々は積極的に評価できるが、それを上手く回していくための状況を一緒に考えていくことが重要と思う。

委員長：JGC、JGNがサポートに加わったら好転するのか。やる気はあるが予算がないので身動き取れないという状況で、どのように我々がサポートできるか、何かアドバイスはあるか。

委員：おそらく予算はついていていると思う。なので力の入れ具合というか、人員が減ってもうまく回っていくのはかつての5人体制で専門員がいた時と同じ回し方では回らないと思うので、うまく力点を定める所が話し合っていかなければならないポイントだと思う。

委員長：そこが力点ですね。

委員：お金をかけてビジビリティをあげるためにバナーを作っても何のためのビジビリティなのか、誰に向けて周知したいのかということの協議がない。なので作戦が立てられない。バナーを置いたりとかそういう努力をしているので、アドバイザー的な立場の人は当然必要だと思う。目的を考えながら。

委員：ここは前向きだと思っていて、遠軽町の全員ではないが白滝の黒曜石が町の宝であって、考古学と地学の力で街のブランドにして客も呼びたいということで皆合意ができると思う。ジオパークかエコパークなのかそれともゼロ磁場なのかと言っている状況よりはずっと前向きだし、これまで一旦は動き出した、そして動き出した時にそれを支えていたものが残っている。あとは人的資源の配分の問題。誰を呼びたいか、力を入れたことによって何をメリットとしてどういった成果を出すか。これだけ力を入れたらこういった成果があったという成功体験がないと役場としてもジオパークに重点的に人を割くことが理解されない。その作戦だと思う。

委員：あとは、白滝ジオパークの方々をはじめとして集まってもらったヒアリングでは、担当者が変わることで進みが悪くなったり、継続的に引き継がれないというやり辛さを感じているという声や、事務局で仕事を抱えてしまっていて、ふってくれば協力できるのに、それがされていないので、やる気のある人たちからは問題として声があがっていた。そういう連携もかつて2019年3月まではうまくいっていたのかなと思うと、そのあたりがうまくいっていないと感じる。

委員長：単にイエローを出せば良いという話ではないので、先の委員達の話を中心に、もう少し踏み込んだ方がいいのではないかなと思うが、いかがか。

事務局：今後JGNとしてもサポートをしていくという話で、どうやって実務的にサポートをして行くかという意味で知りたいのだが、先に出てきた職員は教育学で地学を学んだ方がジオパークにも関わりの深い研究者の教え子と聞いている。ただ、かなりの新人だと思うので動きやすくするにはどうサポートすればいいのか

ヒントがあれば教えていただきたい。

委員：若い方で、小学校教育が専門で地学関連の教材開発をしていたりして、ジオパークに学生時代から関わってきている。解説に関しても小学生に分かりやすく工夫して動くことができるが、なにしろまだ若いということと、今後異動してしまう可能性がある。彼自身にはやる気があるので、引き続きジオパークに関わって正しい方向に成長することが期待できる。ただ彼が大局的にジオパーク全体をみて、他のジオパークとの関わりを強化しながら舵取りをしていくには時間がかかるのではないかと思う。関わり方としては、私の目線からだとそのままジオパークに置いてもらった方がジオパークにとってはプラスになると思うが、彼のみに全部背負ってもらってうまくやるのはまだ少し難しいかも知れない。

委員長：提案としては条件付きになっているが、はたして条件付きで出して効果があるように思わないのだが、かと言って今のままでいいと理解されるのも困る。現地調査を行った委員の感触としては、やはり条件付きとして理解を促す方がいいのか？

委員：現地調査員2名宛てに、審査終了後に指摘事項等をもっと噛み砕いてコミュニケーション取りたいという話が来ている。密に関わっていく、それで段々改善していくことを念頭に置いてのグリーンはありだとは思う。

ただ、町長や周囲の力のある方々に伝えるためにはイエローを出してもいいのではとも思う。現地調査員の中でもだいたい悩んで、まずはイエローで提案するという事になったので、委員長がおっしゃるとおりグリーンにしてそのあと密に関わるやりかたもあると思う。

委員長：判断が非常に難しいが、どなたか意見はあるか。

委員：黒曜石は旧石器だけで縄文時代とかは関わらないのか？

委員：黒曜石はずっと、続縄文時代と言われている本州の弥生時代に当たる時代にも使われているが、縄文以降は巨大な露頭から使うことはなくなり、川に転がっている石を利用するようになる。新しい時代は川に転がっているものを使うので、全町域に広げられる可能性はある。

委員：世界遺産申請の北東北の縄文遺跡群には入っていないのか。

委員：構成資産は入っていない。

委員長：認定についてのご意見はいかがか。

副委員長：すごく難しい。話を伺うと南アルプスよりまだ頑張っている様子がわかるが、ネックはスタッフの減員と専門員の不在。グリーンを出してそこが解決できるのか、それとも増員のための理由としてイエローが有効に使えるのかどうか、そのあたりの見極めではないかと思う。グリーンではこの体制で認めてもらったのだから現状で良いとなるのではないか。そのあたりはどうか。

委員長：難しいが、現地調査を行った委員に伺いたい。今グリーンを出して、報告書の中で「人員不足が深刻である」というだけで解決するものかどうか、そのあたりいかがか。

委員：イエローを出しても人の雇用は難しい状況と思われる。ただ外圧的な形で深刻さを全員に感じてもらい、正しい方向に行くこともあるかと思う。いずれにしろグリーンでも、今回の現地調査員を始めとして深く関わっていかねばならないと思う。私としてもかなり難しい。判断に苦しむ。

委員長：グリーンを出す方がリスクがある気がする。イエローを出して丁寧に説明する方が、今よりは悪くならない。私としては、条件付きはやむを得ない、そのための十分なケアをするということとどうだろうか。

委員：方向としては同意見。やる気はあるのは確実に2023年開催の黒曜石の国際学会で、地質遺産を地域社会へ還元するセッションを組み入れて発信したいという思いもあるようだ。手順として今の状態では危ないのだということをしっかり認識してもらうためにイエローを出して、それがうまく2023年に繋がって、という成功の流れができればいいと思う。委員長の考えと同じである。

委員長：白滝ジオパークに関しては条件付きということで結論を出したいが一同よろしいか。

一同：(意見なし)

委員長：では白滝ジオパークは条件付き再認定とする。後ほどアドバイスの仕方について考えていく。

#### 【審議事項 議題⑤】

委員：箱根といえば有名観光地で一度は行かれた方も多いのではないかと思う。そういうところでジオパークをするのは大変なのだなど感じつつ、イエローという評価をした。現地調査は私ともう1名のJGCから委嘱された方の計2名でおこなった。ただ本当にイエローかと言われると、黄緑というのが本音のところ。先程副委員長が言われたようにイエローで事務局体制をしっかりともらいたいというのが現地調査員の願いである。だが今までの南アルプスや白滝の審議を聞いて、箱根は本当にイエローで良いのか、というのを感じている。

まず、前回2016年の指摘事項について。この時の構成は小田原市、箱根町、湯河原町、真鶴町に南足柄市が加わって2市3町でエリア拡大認定となった。その時の指摘事項「ジオパーク全体に共通するジオストーリー」はまだまだというところ。一番分からないのはテーマ。色々なパンフレットにあるが、「北と南をつなぐ自然のみち、東と西をつなぐ歴史のみち」これが非常にわかりにくい。このあたりがネックで「ジオパーク全体を語るガイドの育成」が遅れているのではないか。まだ改善途中で、指摘事項が十分クリアできているとは言えない。テーマについても分かりにくいテーマのままジオパーク活動を続けている。そのあたりガイドとしても説明しづらいところではないかと感じた。

その次の「箱根ジオパークガイドとしての統一感を保つ仕組みづくり」改善はみられているが認定ガイドが中心となって共通のガイドマニュアルを作成したほか、全エリア4種類のガイドブックを作成するなど改善はされている。ただ実際、ガイドのレベルにはまだ差がある。

「具体的な行動計画の策定」は作成されている。ただ、行動計画から、箱根ジオパークがジオパークというプラットフォームを使って地域をどうしたいのかというところがなかなか見えてこないところがある。

それから「推進協議会の意思決定プロセスの可視化」については4つの部会、ガイド部会、観光部会、教育部会、学術部会を設置してそれぞれ分担して行うことで改善が図られている。

「事務局体制の改善」は各部会事務局を箱根町以外の自治体に振り分けることで広域連携の体制を作ろうとしている。ただ我々が気になったのは、事務局長が箱根町の企画課長だが、エフォートが20パーセントということで、なかなか連携をするというところに集中できていないのかなど。その分、事務局員が一生懸命されているというところ。また、各2市3町の温度差を感じるのはロゴマーク。名刺をもらった際に箱根町関係者は箱根ジオパークのロゴマークを名刺に入れているが、他の市町は入っていない。小田原市に至っては大河ドラマ誘致が記載されていた。

「組織的かつ全域的な教育活動」これはかなり進展していて、概ね解決されているというところ。

「普及活動の向上」についても、かなり取り組まれていて前回の指摘事項はクリアしている。

評価については、全域的な教育活動が充実してきた点である。各教育委員会も関わって、小中校出前授業や教職員向け研修を行なってきている。このジオパークの一番の強みというのは温泉地学研究所と生命の星・地球博物館がある。このように恵まれているところは他にない。それによって活発な研究活動、2015年に水蒸気噴火もあり、国際的シンポジウムで情報を発信するところは特筆される。それから協議会をサポートする博物館、研究所のほか多様な人材がいるというのも都市に近い所の強みだと思う。さらに箱根、石丁場などの文化財とジオパークとのつながりもうまくされている。事務局分担も工夫されている。それから国立公園との連携。また先程も言ったが水蒸気噴火による火山防災への取り組み。この辺は断トツという気が



する。

一方、気になるのは、箱根ジオパーク全体のビジョンが共有されているのか、それからテーマがわかりにくいというところ。そして事務局体制の改善、先ほど事務局長の兼務ということもあったが、我々は現地調査の際にそのことを重要視してイエローの一つの根拠としたが、その後、兼務であってうまくされているところもあると聞いた。なので必須条件ではないことを後から理解した。

あと、協議会事務局に専門員がいないこと。以前は地質を学んだ職員がいたが、異動したということだが、専門家とうまく繋げる専門員がいればもう少し色々な分野が連携していけるのではないかという気がする。大涌谷には拠点施設の箱根ジオミュージアムがあり、小規模ながらも色々な展示を工夫されていて、いざとなれば避難場所にもなる。学芸員が頑張っているが、その方は事務局の専門員ではない。適材ではあるので、もっと活用の仕方があるのかなというのが我々の印象。

それからひとつ大きな問題が、ジオ・エコ・文化のサイトの分類が進んでいない。と、同時にサイトの保全計画ができていない。それもおそらく専門員不在に起因していると思われる。

また、箱根ジオパークのテーマの分かりにくさは、生命の星・地球博物館の館長提案で反対できないのを引きずっているのかな？という気がしている。

それから、拠点施設・駅等におけるジオパークの可視性。これは我々の第一印象が悪く、現地調査員それぞれ別に小田原駅に到着してあちこち見て回ったが、小田原がジオパークであることが全然可視化されていなかった。駅のコンコースを歩いても何の表示もなく、観光案内所に行ってジオパークのパンフレットありますかと尋ねて、ようやく部屋の奥から一つ出してくれたというありさまだった。箱根ジオパークの玄関口である小田原に来た時に箱根ジオパークがあるということがわからない。ただ、後で聞くと、箱根鉄道・小田急の小田原駅改札内にはあるとのことだった。ただ、駅のコンコースは国土交通省の管轄なのでのぼり旗等を立てられないと説明を受けたが、北条五代を大河ドラマに！というのぼり旗はあったので、小田原市は大丈夫かなということで、最初の視察先に小田原市は入っていなかったが急遽入れてもらって、小田原市から説明が来て、きちんと行なうという確認は取れた。

それから、地域全体を意識したガイドの育成、これは先ほど。地域住民の参画とパートナーシップは、サポーター制度というものがあるが、どういう人がどのようにサポートしているのかが分からないところがある。

自然遺産や人々の暮らし、産業と地球の営みのつながりについては、例えば箱根の黒たまごは何故黒いか、という素朴なところから地球の活動に入っていきようなことがあっても良いのではないか。

関東地震の災害遺構のサイト指定や情報発信は、災害遺構がかなりあるが、それらをサイトにして情報発信をするのはこれからまだまだ欲しい。

これはJGNの方がよく分かっているかも知れないが、もっとネットワーク活動に参加して全体を活性化してほしいというところ。

全体としての印象は、箱根というのは皆さんが行く観光地のトップクラスのブランドだと思うし、そこが凄いジオパークだとなると、ジオパーク全体のブランド力が上がる。そういうポジションにいる。しかし、行ってもなかなかジオパークに行ったと感じられない。どうすればいいのか、というのが我々現地調査員がイエローに向かったことかも知れない。ただ、これも比較なので、他と比べると非常に頑張っているというのも事実。

委員長：最後、非常に明確なことを指摘してくれた。基本的には全体のビジョンやテーマがわかりにくいということと、事務局体制については専門員不在がネックになっているということだが、実際に学術面は博物館と温地研でカバーしているという話。いずれにしてもジオパークの看板としてここを何とかしたいという気

持ちでイエローを出されたのだと思う。さて、これから質疑を受付ける。

事務局：前回現地調査を行なった者として、前回の課題について、表の中では最初にジオパーク全体に共通するジオストーリーが第一課題のように上げられているが、ここが箱根ジオパークだというストーリーで説明するガイドが不足していて、全体に共通する箱根ジオパークの特徴がまずあって、そのなかのジオサイトがこうですよ、という展開になかなかならなかった。例えば湯河原へ行ったら湯河原の話という風だったのでそこは強調したのだが、実はリコメンデーションのところが一番重要視したのは、そのためにはまず学術部会を設置する必要があるのではないかという点。豊富な人材資源があるので、その方々を活用して学術部会を立ち上げて、そこからストーリーを考えて行ったりということが展開出来るのではないかといいことで、そこに重きを置いていたが、その学術部会は立ち上がっているということはプログレスレポートにも出てくるし、今回の報告でもわかる。そのあたりと次からの課題もさきほどの報告にあるように着手していない課題はないと思われる。

サイトの整理も着手はされていて、まだ途中であり、まだまだかかりそうというのが現状と認識している。

事務局体制については、広いエリアなのに事務局が小さくて、事務局ワーキングを作って工夫はされていると評価されているが、ミュージアムの学芸員の位置づけが今回の審査結果報告書案にも出ているが、もう少ししっかり事務局員として位置付けられないか。拠点業務を運営しているがエフォートの見積もりも低い。彼女はもっとジオパーク業務をしているので、事務局として意思決定に関われるようになるというのが事務局体制改善のポイントなのではないかと拝見した。

委員：全体の伊豆の衝突から語れるようになったが、逆に言えば湯河原に行っても目の前にあるものではなく伊豆の衝突から話が始まる。そうではなく目の前のものから伊豆の衝突に繋がっていく、そういう話をしてもらわないと面白くないですよと、コメントしてきた。

委員長：おっしゃるとおりで、こういうガイドはあちこちに出没している可能性がある。このほか審議に関わるコメントがあれば。

委員：委員や事務局からもコメントがあったが、やっている、やっていないで言えばはやっている。なのでイエローカードを出すのは難しく、冒頭に出たきちんとした分かりやすい基準をもとに、とするとなかなか難しい。箱根なのだから、という気持ちでイエローという提案が出ているように思う。

委員：最初の審議を聞いたときに、黄緑から限りなくグリーンの方に段々近づいてきた。

委員：一方で何のためにジオパークをしているのかよくわからない、という気持ちもわかる。ここは2007年からジオパークをやろう、と活動してきた地域で、その時から、何のためにジオパークをやるのかずっと聞き続けているが相変わらずよくわからない。箱根にもう一つ勲章が欲しいだけではないですか？でもたいした勲章にはなっていませんよ？と思っている。

委員：それも聞きました。最初は観光だったが、教育の方にシフトしていくという印象があり、南足柄はどちらかというと教育に力を入れている。箱根も（現地調査後に）町長が引退されて前の副町長が町長になられたと伺っているが、町長に聞いたところ箱根は観光客が2千万、3千万と来るが、地元の若い人は出ていくという話をされた。最初は観光だったが、だんだん教育人材育成、防災の方にシフトするのかなという感触は持っている。ただそれがはっきり出ていない。

事務局：2007年当時からなんのためにという話で、ひとつは大涌谷が噴火したり、長らくミュージアムもできた直後に閉鎖になったりと、その経験があってジオパークを通して防災教育を強化するのだというのは体験を通して、かなり地域のなかで共有されていると思う。ただ、委員もおっしゃったようにあれだけ観光客が来ているのに観光に対しては何もしないのかというのはポイントだと思う。

先ほどの説明で伝えそびれたが、課題のなかにネットワーク活動を挙げられたが、プログレスレポートに

も調査報告書にも書かれている通り、ネットワークへの貢献も全地域と比較しても活発で、研修会の受け入れや、色々なところで箱根ジオパークのネットワークへの貢献はかなりある方だと認識している。

委員長：色々と意見が出て、現地調査員の方も黄緑からグリーン寄りになってきているところだが、うまく事務局体制を活かすようなコメントを報告の中に盛り込んで、学芸員の処遇についても書き込むという形で、箱根はグリーンということを通してはどうかと思う。異議のある者は？

一同：(意見なし)

委員長：それでは箱根ジオパークは再認定とする。

#### 【記者発表資料作成】

※プレスリリース資料の文面を確認。

#### 【閉会】

委員長：今日の審議を終えたが、未発表の状態なのでどこにも漏らさないようにお願いします。

後の議論でひっくりかえるかもしれないので、留意していただきたい。

事務局：次回は明後日1月21日10時から第41回JGC第二部を開始する。

委員長：本日はお疲れ様でした。ありがとうございました。